

第四篇 霧嶋火山有史爾來ノ

活動

本火山有史以來ノ活動ニ就テ最古ノ記録ハ西曆1652ニ始マリ、而シテ其ノ記録ニハ霧島ト明記セズ「曾乃峰」ノ稱ヲ用フルモ「峰下五六里」ナル句ヲ用フルヲ以テ見レバ現在ノ櫻島ニアラズ霧島ヲ指セルモノナルベク、其ノ他昔時霧島ノ南側ヲ「曾於郡」トセシ「ハ文政四年ノ記録中ニ明白ナリ。

△大平十四年(1493)十一月大隅國空中ニ聲アリ大鼓ノ如シ野雉相驚地大ニ震動ス按ニ大隅曾乃峰ノ噴火ナラム(續日本紀)。

△延曆七年(788)七月發西大宰府言去三月四日戌時當大隅國贈於郡「曾乃峰」上火災大熾響如雷動及亥時火先稍止唯見黑煙然後雨砂峰五六里委積可二尺其色黑矣(續日本紀)。

因ニ曰フ此ノ炎上ハ大同。弘仁。天長。承和。嘉祥。仁壽。齊衡。天安中ニ至ルマテ息マザリシ説アリ。

△天慶八年(945)僧性空霧島山ニ登リ法華經ヲ誦シテ神ニ祈ル「七日ナ期ス居ル」五日ニシテ闔山震動シ猛火熾シニシテ暫クモ止ルベカラズ天曆中ニ至リテ性空乃チ煙火ヲ避ケ迫門丘ノ神廟ヲ西北二里許ノ地ニ遷ス庵ヲ結ヒテ禪居スル「四戴ナリト言フ。(襲山考)。

△天永三年(1112)二月三日霧島山上大ニ燃ヘ神社燒亡ス(錫杖緣起)。

△仁安二年(1167)霧島山炎上ス(霧島神社舊記)。

△壽永二年(1183)十二月十七日大隅霧島山噴火ス(ミルン氏)。

△文曆元年(1234)十二月霧島山大ニ燃ヘ山上ノ靈泉天ノ井潤レ神殿僧坊悉ク燒失ス(錫杖院緣起)。

△大永二年(1232)大隅桑原郡踊郷宿窪田村安樂ノ温泉湧出ス(安蘇宮略記)。

△大永四年(1234)是歲大隅霧島山噴火(地學協會)。

△天文二十三年(1554)天文二十三年ヨリ霧島山又火發リテ明和九年マテ二百三十餘年ノ間燃シ「十餘度ナリ(地理纂考)。

△永祿九年(1568)四月霧島山炎上ス(日向飢肥松井蛙助手記)九月九日霧島岳噴火人多ク死ス(島津國史)四月七日人多ク死ス。

△天正二年(1574)正月霧島山神火ヲ發シテ天地ヲ震動ス(襲山考)。

△天正四年(1576)霧島山神火ヲ發ス(伊地知季安舊記)。

△天正十三年(1585)十月十五日ヨリ大地震年ヲ逾ユ(松井蛙助手年代記)。

△天正十五年四月十七日(1587.5.24)霧島ノ神火震動シ黑煙ノ上ニ白雲霏キ一日ニ三度巍々數ク立(古年代記)。

△天正十六年三月十二日(1588.4.7)霧島山上神火ヲ發シ申酉ノ間大地震(舊記)。

△慶長三年(1598)一同五年(今村博士)。

△慶長十八年(1613)一翌年(同上)。

△元和元年(1615)一翌年(同上)。

△元和三年(1617)一翌年(同上)。

△寬永十四年(1637)一翌年(同上)。

△萬治二年(1659)ヨリ寬永元年(1661)(同上)。

△寬文二年(1662)ヨリ同四年(同上)。

△延寶五年(1677)霧島山神火起(古年代記)。

△延寶六年正月九日(1678.3.1)霧島山火起(古年代記)。

△寶永二年(1705)十二月十五日霧島山炎上シテ神社堂塔家悉ク焦土トナル(史館藏本名勝志拔寫)。

△享保元年九月廿六日(1716.11.7)霧島山神火大ニ起リ絶頂北ノ腰燃ホケ翌年正月又大ニ燃ヘ三、四ヶ年ノ間灰ノ降ルヲ春霞ノ如ク近城外城石ヲ飛シ田地ニハ四、五尺宛砂埋ム(伊地知季安舊記)。九月廿六日夜半頃ヨリ霧島ノ西岳震動シテ周圍三里半程處々ニ噴火破裂シ爲メニ其ノ地内ニ在ル所ノ山林及ヒ神社佛院等悉ク焼失ス(官報第五百十五號)。享保元年九月廿六日大隅國霧島山大噴火九月廿六日夜半頃ヨリ霧島ノ西岳震動シテ周圍三里半程處々ニ噴火破裂シ爲メニ其ノ地内ニ在ル所ノ山林及ヒ神社佛院等ハ悉ク焼失シ其ノ他炎害ヲ被リシモノ砂石入ノ外城(外城トハ一ヶ郷ヲ言フ)十二焼失シ此ノ家數六百軒(或ハ六百四軒)負傷三十一人斃死ノ牛馬四百五頭田畑六千二百四十町八段六畝十九歩此ノ農産高六萬六千八百八十二石餘(官報)其ノ後三、四年ノ間灰下リテ恰モ春霞ノ如クナリシト言フ(地學協會報告)。

△享保二百年正月三日(1717.2.13)

享保二年一月三日戌午日向國鶴鳴山昨年九月ヨリ火ヲ噴キ十二月廿八日、廿九日兩日震動強ク近傍ニ砂雨ヲ降ラシ是日ニ至リ地大ニ震ヒ砂石ヲ飛シ黑煙天ヲ焦シテ殆ト闇夜ノ如シ(承寛襍錄)―地震史料上卷第三四三―四頁。
享保二年正月申來由。

松平薩摩守領内日向國鶴鳴山去年九月ヨリ焼出シ震動相止不申候處舊臘廿八日廿九日兩夜夥鐘震動同國御代官所那珂郡之諸郡縣十三ヶ村高一萬石餘之處鶴鳴山ヨリハ道程十里餘有之所ニ燒灰砂利段々降り當正月三日ノ朝五ツ半ヨリ九時迄ニ成大地震砂交リ燒石降り積候處田畑麥作菜園埋事四、五寸、七、八寸悉砂地

ト成リ御代官寶七郎左衛門ヨリ注進有之候。

享保二百年正月三日(1717.2.13)辰ノ刻頃ヨリ中天夜陰ノ如ク闇ニ成ル但東西南北ノ麓ハ晴天島中郷里家々ノ内暫ク内闇シ同月七日大地震同十日申酉ノ間ヨリ小雨ノ如ク白キ砂降ル。―註。本會ノ日本地震史料目ニ依ルニ此レト同年月日ニ日向霧島山噴火近傍大震トアリ去レバ八丈島ニ於テ同日闇ニ成リタリトハ霧島噴火ノ細微ナル灰ガ疾風ニ吹キ送ラレテ八丈島ニ落チタルナランカ。同月十日小雨ノ如キ白キ砂ガ申酉ノ間ヨリ降ルトアルモ或ハ又霧島山ヨリ來レルモノナランカ。霧島山ハ八丈島ヨリハ西南西即チ申酉ニ當レリ。大森博士。八丈島及青ヶ島災地記錄)。

享保二年(1717)八月十五日大噴火土灰頻ニ飛ヒ近郷ノ田ヲ埋ムルコト數十里(西藩野史)。

△安永元年(1782)或ハ明和九年霧島山炎上シ日向國諸縣郡ノ諸邑民屋田園多ク災ヲ被ル(地理纂考)。

△文政四年十二月二十日(1822.1.2)噴火(今村博士)。

文政四年(1822)霧島噴火ニ就テノ記錄ハ今村博士ノ好意ニ依リテ得タルモノニシテ該記錄ハ鹿兒島縣立第一鹿兒島中學校教諭伊地知茂七氏ヨリ博士ニ提供セラレタルモノニ屬ス。

文政四年十二月廿日霧島噴火記

當月廿日朝霧島山北ハ有之候中岳ノ絶頂ヨリ火發候様子にて、白煙少々相立候處晩方に相成黑煙おびたゞしく炎上リ近邊の地迄も致震動候只今に至り候ては漸々相靜候得共煙は止不申候今日晝時分より此表少々雨降候處國分新川へ硫黃流出淺瀬迄も水底相不見程に御座候新川筋の儀は日當山の内に安樂川と相會候場處有之硫黃右松永川筋より相流此邊より水上に相成候ては硫黃氣殊更濃く

川水もどろつき候程に有之候由松永川上は踊之内明礬山より出會會於郡大久保へ相通候因て相流候硫黃の次第開合仕候處右明礬山邊川中へ兼て温泉湧出候場處有之中岳燃に付右川中より俄に硫黃吹出候杯と風聞仕前文新川筋硫黃氣の勢と合せ考候に僅少の雨降にて燃出候灰洗下し候位とは相見得不申候右に付國分川東諸村の田地へ相掛候用水過半は右松永川より相掛候處萬一以來前件通不斷硫黃氣相流候はゞ手廣田地都て加久藤、白鳥邊の地面同様に成立可申誠に以不輕事候其上燃出候儀固より非常の事に付當郷は勿論會於郡横目等へ早即糾方等委申越候得共只今に至り何れも埒明不申候故先私見聞仕候形行早々御届申上候以上。

但本文中嶽何郷の境内に候哉未相知不申候尤國分新川西宮内新田溝筋の安樂川より用水相掛候得共硫黃氣無御座候

已十二月廿二日

國分表締方横目

寺師 次右衛門

御裁許掛衆

右書付差出候處翌廿三日會於郡横目稻留彦右衛門川越清兵衛より糾方の返答書相達致披閱候處全く不通の文章故即刻右兩人へ相用申越候處不翌廿四日右稻留彦右衛門差越候は國家名山大川の成行共委敷申聞候處郷士年寄共にも左様の頓着も未不仕由申候付行司山方役共へ申付明廿五日曉より嶽山へ差登り燃出本且硫黃湧出候場可相究旨申達彦右衛門差返申候其翌廿五日濱之市詰同役山田増右衛門余の旅舎へ到來候間右の成行申達候處致同意且來廿六日には右山登の者共罷下る賦候間余會於郡麓迄差越直ちに可相糾旨致相談候處其通にて糾方の書方連名にて申上後に草稿爲相見候て可然旨増右衛門より承届候右に付十六日朝より會於郡重久村へ差越居候處夜入時分前文行司共歸來候間仔細承届致一宿廿

七日住吉村へ罷歸書付相認御裁許掛へ差遣右草稿書寫山田氏へ遣候左の通り。去る廿二日御届申置候通り今度霧島山炎上に付國分新川迄硫黃氣流下り候得共此表郷役々一向頓着不仕候付一昨日會於郡行司山方役共を懇と嶽山へ差登せ左の燃口爲見届候處中嶽の北半七、八分目新に燃出候口四ヶ所計有之只今最中燃盛煙影數候に付委敷は不相知候得共其間何れも壹町程づゝも相隔り候體に見及尤此邊の地形西下りの廻頭にて硫黃交りの泥時々湧出し迫尻大河内と申谷川へ流入夫より下り明礬山南より霧島宮の下相通り直に松永川へ流出候迄も見届昨夜罷下り申出候右に付相考候得者右嶽、享保元申年燃出候より當年迄百六年に相成其時の燃跡先年以池に相成爲居由候處此度燃出候場所右之側に相當り候付其邊へ自然と水氣有之前文通り硫黃氣の泥湧出候賦に御座候尤此表郷は其節の砂入硫黃相除爲申由國分邊より中嶽迄は凡七八里程相隔り燃方は追々不相止體に候得共最初廿日の朝火發候より西風吹續此表へは灰砂降不申故人何之用意も不仕候得共去る廿二日始て硫黃氣相流候て其翌日は少々相止候處同廿四日には又々相流初發より尙々甚敷此に至り其氣一切相絶不申川筋の魚類も悉致毒死勿論會於郡の内田口松永の兩村は井戸出水等も無之場處にて右川水召仕申候處前文通りに付ては朝夕の仕水并牛馬飼方等迄も別て難儀仕候由田地用水の儀は當分都て相落し有之候得者少も差支不相見得候共右松永の井手頭に相係り候村々は會於郡の内田口大窪川北踊之内持松村大井手下にて相用候村數は會於郡の内清水の内姫木日當山の内東郷武分の内新町府中野口松木小村合て十二ヶ村にて大抵右の御高五、六千石餘皆々右用水の由に御座候右に付會於郡地圖相見合申候處大河内川より下松永の井手場迄大概五、六里程有之其間段々谷川等御座合候に付硫黃水の流は鑿り抉り脇方へ可相導場處は有之間敷哉と段々詮議仕候得共右様地形の場所一切相見得不

申前文行司等見届候次第に御座候得共燃場遠方にて當表の諸郷只今は危難の節差て相見得不申候得共此涯不相熄以來時々今通有之候は災殃相受候者此表の諸郷眞初に其上御記録方御用にも可相係格別の儀候旨郷役共へも申諭炎上の儀相究并最初御届心得の様體等委敷相糾重て此段申上候尤中嶽燃出場の儀は曾於郡小林郷境目にて大半は曾於郡内御座候以上。

國分表締方横目

巳十二月廿七日

寺師次右衛門

山田増右衛門

御裁許掛衆

昨日は御光來御親切御教示等承知仕忝く存候其節御咄申上候此度霧島山燃出糾方として即刻發足曾於郡へ差越候處山登の者共段々夜入罷歸候に付直ちに成行等承届候處夜更に相及候故無是非一宿仕右に付所役共にも近日地頭所等へ届け出由承締方の披露相後候ても不手涯の筋と存候に付早速相糺候形行書調乍推計昨日被仰聞候因て右草稿寫取左之通入御覽候御存知之通り愚昧の拙者にて作文極々拙く候に付千辛萬苦漸々綴立候へば貴覽に備へ候儀も殊に無御面目候乍然蟻の心切に相考候へば今度霧島山炎上に付ては誠に異變の大なる物に候得者文體も此く異様に相認可然と存短才をふるひ書調候に付全く御國體に不似合頗る他州杯の體格に似寄候に付御裁許掛衆御笑草に相成可申拙者事當役十餘年相勤候得共未爰ての御用向等相勤不申候故鹿兒島横目體の書付別て御案内にて晝夜心掛稽古仕候得共一切相進み不申動れば野鄙の文字書出し恐愧無此上存申候何とは御優恕可被下候

此ノ記録ニ見ルニ文政四年ノ活動ハ明方ニ中嶽ナルヲ記シ其ノ他ノ記事ニ

徴スルモ中岳群ノ活動ナルヲ疑ナシ。享保元年ノ噴火記録中ニ西岳ナル語ヲ發

見スルモ文政四年ノ記録ハ之レヲ打消シ中岳ノ活動トナセリ。

- △明治十三年九月(1880) (今村博士)
- △同 二十年五月(1887) (同 上)
- △同 二十一年二月二十一日(1887) (同 上)
- △同 二十二年十二月十日(1889) (同 上)
- △同 二十四年六月十四日(1891) (同 上)
- △同 二十八年十月十六日(1895) (同 上)
- △同 二十九年三月十五日(1896) (同 上)
- △同 三十六年十一月二十五日(1903) (同 上)

大正三年一月櫻島噴火前ニ於ケル霧島火山活動徵候等ニ就テハ宮崎縣測候所報告「眞幸地震」ニ詳シ。

△大正二年五月十九日以來ノ眞幸地震

從前霧島山麓地震ト假稱シタルモノハ後日調査ノ結果西諸縣郡眞幸村ニ發震最多ク今日迄ニ知ラレタル事實ニ於テ同村ハ最震源ニ近キモノト見ルヲ得ベキモノアルヲ以テ今後假リニ之レヲ「眞幸地震」ト稱ス。

本地震ノ初發ハ大正二年五月十九日午前四時二十分ニ始メテ人身ニ感知シタルコトヲ西諸縣郡加久藤村役場ヨリ報知アリシガ本調査ノ材料トシテハ主トシテ同村役場(大字栗下)加久藤警察分署(大字松原)同郡眞幸村役場及眞幸尋常高等小學校長石塚幸盛(共ニ大字水流)ノ報知ニ取ルモノナレドモ松原ハ發震後十一日即五月三十日ヨリ水流ハ十三日ノ後即チ六月一日ヨリ通報ヲ開始セルニ由リ其以前ハ後ヨリ知り難クレドモ栗下ノ實測アルヲ以テ此ニ初發ハ五月十九日トセリ。

震央ト震數及ビ地方情況。頻發ノ場所即水流、栗下、松原ノ三ヶ所ニ就テ觀

ルニ松原ハ五月三十日通報ヲ開始シ九月一日迄ニ九十四日間ニ五十九回(内強震四回)アリシモ、本震ノ初發ハ五月十九日ナルヲ以テ同日ヨリ廿九日迄十一日間ハ栗下ト同數ノ地震アリタルモノト假定シ、尙ホ之レニ三十日以後ニケ所ノ増減ノ差ヲ日數ノ割合(即チ十一日間ニ割當)ニテ加算シ、栗下ハ元數ノマ、水流ハ六月一日ヨリ開始シ同日ヨリ九月一日迄九十二日間ニ九十七回(内強震十八回)ナルヲ以テ、其ノ以前五月十九日迄十三日間ハ栗下同數ノ地震アリタル上ニ六月一日以後栗下トノ比較差ヲ日數ノ割合ニテ加算セバ左ノ回數トナル、但シ微弱震百ニ對スル強震ノ割合、強震一回割當タル微弱震ノ數ハ右ノ更算ヲナサズ元數ノ儘ナリ。

松原	總震數	強震	微弱震百ニ對スル強震ノ割合	強震一回ニ對スル微弱震ノ割合
栗下	八三	四	六	一六
水	八六	六	七	一七
流	一一三	一八	一九	五

此表ニヨリテ水流ハ他ノ二ヶ所ニ比シテ強度大ナル上ニ回數モ亦著シク多キヲ認メラル、ナリ。

地方情況ニ依ルニ(一)栗下ニテハ南西―北東ノ震動方向ナルモ水流ニテハ概シテ上下動ヲ感シ、(二)地鳴ヲ發スル方位ハ栗下松原ニテハ西ヨリ南西ノ間ニアルモノ、如ク感知シ、水流ニテハ北西ヨリ南西ノ間ニアルモノ、如クナルモ甚ダ模糊トシテ判明シ難ク、嘗テ試作田ノ作業ノ爲メ村内數ヶ處ニ同時ニ人ヲ配置シタルヲ以テ意ヲ合メテ地鳴ノ起ル方位ニ留意セシメタルニ、地鳴ハアリタルモ發響ノ方位ハ人毎ニ區々ニ聞キ取リ結局其人ノ向ヒタル方向ニ起リタル如ク感知シ遂ニ捕捉スル能ハズ、(三)鳴況ハ栗下松原ニテハ遠雷ノ如キモノ多キモ水流ニテハ近距離ニアリテ物體墜落ノ如キモノ多ク、(四)栗下松原ニテハ震動性質緩

ナルモノ多キモ、水流ハ急ナルモノ即チ周期ノ小ナルモノ多ク、(五)栗下松原ハ水、平、動、多、ク、水、流、ハ、上、下、動、多、ク、(六)初發後數日ノ後眞幸村長ハ隣村大口村長(鹿兒島縣)ニ照知シテ同地ノ情況ヲ問ヒタルモノ何等異狀ナシトノ回答アリシト言フノ實況ニ由リテ推測スル時ハ、水流方面ハ震央ニ近キモノト見テ不可ナカラシ震性……震數ヲ二時間毎ニ區分シ氣壓(宮崎)ヲ四時間毎ノ平均ニ照合スルニ毎日二回ノ最高最低ヲ生シテ氣壓ノ昇降ニ伴ヒテ震數ノ増減(約二時間後)スル處ハ小地震ノ形跡ヲ現出シ、震域ノ狹隘ニシテ東南東約十四軒餘ノ小林ニモ波及スル事ノ罕ナルハ火山地震ノ特性ヲ現ハスモノト言フベシ。

第一次霧島山噴火 大正二年十一月八日

大正二年五月十九日午前四時二十分頃西諸縣郡加久藤村ニ弱震ヲ感知シ、引續キ頻發シテ九月一日迄加久藤眞幸ニ百七十五回ノ地震ヲ發シ……其後大間歌ヲ置キテ十月十七日ニ再發シ十九日迄三日間ニ三回ノ強震起リ、又復前編第四表(卷)ノ如キ活動ヲ開始シ十一月八日ニ至リテ霧島山ニ程度大ナラザル爆發ヲ見ルニ至レリ……曩ニ眞幸加久藤ニ地震ノ頻發シタル後數日ニシテ技手大槻修、兒玉寛チシテ霧島山ノ噴火孔ヲ視察セシメタルニ、坑内填充シテ坑底從前ヨリ高マリ所々ニ白煙ノ小噴出アルニ過ギザリキ、然ルニ此ノ填充ハ蒸氣ノ逸散ヲ妨グテ鬱積セシメシ爲メ蒸氣張力ノ緊張ニ由リテ地震ヲ頻發セシメ、地殼ノ弱點ハ遂ニ蒸氣ノ張力ニ堪エズシテ今回ノ爆發ヲナセシナルベシ。然レドモ今回ノ爆發ハ程度大ナラズ被害ハ僅少ノ部分ニ止マルベクモ、之レヲ爆發スルニ至ラシメタルモノハ蒸氣張力ノ外ニ外力ノ作用ガ噴火ノ副因又ハ動機トナリテ助成挑發シタルモノナキカ、茲ニ當時ノ氣壓變化ノ概況ヲ見ルニ六日早朝一個ノ低氣壓奄美大島ノ北西ニ現ハレタルモ消失シ、午後ニハ城津ニ低氣壓現ハレ東南東ニ進出シテ七日早朝ニハ新潟沖ニ來リタルモ阿哥斯海ノ大低氣壓ニ併合セラレ、一方支那方面ニハ廣大ナル高氣壓ノ發達シテ堅實ニ東方ニ

發展シ來リ、八日午後ニハ其中心ハ黄海ニ出テ本邦ノ殆ド全部ハ高壓部位中ニ入りタルヲ以テ、當地ノ氣壓ハ日本海ニ來リタル低氣壓ノ爲メ八日午前二時迄ハ平年ヨリ低カリシモ、午前六時ニ至リテ平年ヲ越ヘ以テ九日ニ及ベリ、氣温ハ七日ノ夜迄平年ヨリ過高ナリシモ、西風ノ起リニ當テ當地ニ此ノ現象アルトハ敢テ異トスルニ足ラズ、注目スベキハ高氣壓ニ遇フテ爆發アリシト是ナリ。

七日大陸颶風ノ日本海南部ヲ北東ニ通過スルニ當リ、當地ノ氣壓ハ隨ツテ沈落シ、午前三時ニハ七五七・四耗迄降リタルヲ極度トシ、其レヨリ上昇シタルモ、八日午前六時迄ハ尙平年ニ及バズ、然レドモ支那方面ニハ優勢ナル高氣壓發達シテ東ニ擴張シ來ルヲ以テ當地ハ低壓部ノ後面ヨリ出テ午前十時ニハ平年ノ示度ヲ超過シ、引續キ增高シテ高壓部ノ前面ニ當リ、八日夜ニハ高壓部中ニ入り翌九日午前二時二十分頃噴火セリ此高壓部ノ前面ヨリ高壓部位ニ入りテ發動セルトハ前二回モ同様ニシテ颶風ガ日本海ヲ北東ニ通過シタル後ニアリタルトハ明確ナリ。(以上宮崎測候所報告「眞幸地震及噴火」鈔録)。

大正二年十一月八日霧島山爆發シ、再ビ十二月九日午前四時十五分ヲ以テ爆發シ降灰宮崎ニ迄及ベルモ、前回ノ明治卅六年十一月廿五日午後八時二十五分ノ爆發ニ比シテハ本年ノ二回ハ著シク輕微ニシテ、從ツテ震動降灰等ノ區域狹ク、宮崎ノ降灰モ注意ナキモノハ知ルヲ得ズ、熟睡ノモノハ音響ヲ聞知セザリシ程度ニ在リテ、強音ヲ聞キ震動アリシハ都之城以西ノ山麓ニ近キ區域ニアリシガ如シ。

次ニ小藤博士ニ依ル(小藤博士。「大正三年櫻島大噴火」東京理科大學紀要第三十八册第三編第九十九頁)上記ノ地震群及噴火、且ツ之レニ關係セル鹿兒島市西方伊集院地方ノ地震ノ畧表ヲ掲グ。大正三年一月櫻島噴火及之レニ關係セル地震群ハ該表ニ連續スベキモノトス。

第三次霧島山噴火 大正三年一月八日

時 日 回 數

霧島山昨年十一月八日ヲ以テ第一回ノ爆發ヲナシ、同年十二月九日第二回ノ爆發アリ、今又三年一月八日午前二時二十分頃爆發ス、宮崎ニテハ第二回目ニ比シテ爆音比較的強カリシモ未ダ甚大ナラズ、異ル處ハ稍長クシテ約二十秒ヲ越エタルベク、戸障子震動シ地震降灰ナカリシモ、山麓北諸縣郡西岳村宇牛^{ウシノスネ}方面ニテハ栗實大ノ石ヲ降ラシ、御池ヨリ西方噴火口ニ稍近キ小宇赤道ノ一部落ハ屋上ニ落下スル音響々タリシモ、荒襲方面ニハ砂灰共降ラズ空氣震動ノ波及セザリシハ縣内極北部ノ三田井延岡方面ニシテ爆音ハ南方全部ヨリ兒湯郡全部ニ達シ、田野都之城鹿兒島縣始良郡東襲山村ニハ降灰ヲ見タリ。

地震ハ第二回(十二月九日)爆發ノ後ハ霧島火山脈ノ系統ニ屬スルモノハ一月四日午前三時四十五分ニ加久藤村栗下ニ約五十秒ト覺ユル性質急ナル水平動ヲ感知シタル外ハ人身ノ感ニ上ルモノ一回ダモナシ。

第一期	五月十九日—三十日(十二日間)	二四
強震 10.3%	六月二日—八日(七日間)	一五(內強震四)
	六月二十五日—七月二日(八日間)	三一(內強震八)
	六月二十九日—三十日(伊集院地震)
	七月九日—十八日(十日間)	三三(內強震六)
第二期	七月二十三日—卅日(八日間)	一一(內強震一)
	八月四日—十三日(十日間)	七
	八月十六日—二十三日(八日間)	三七(內強震一)
強震 14%	八月廿七日—九月一日(六日間)	一七(內強震三)
	九月二日—十月十六日(四十五日間)	〇

十月十七日—十一月十六日(卅日間) 一一(内強震五)	第三期
十一月八日午後十一時第一次霧島噴火	強震 35%
十一月十七日—大正三年一月三日(四十八日間) ……〇	
十二月九日午前四時十五分第二次霧島噴火	
大正三年一月四日—十四日(十一日間) ……三	
一月八日午前二時二十分第三次霧島噴火	
一月十二日午前十時五分櫻島噴火	一四

大正二年ヨリ同三年ニ互リタル地震群ノ襲來後ニ一年餘ヲ過ギテ大正四年八月中ニ眞幸村ヨリモ南西ニ位スル吉松栗野地方ニ於テ同性質ノ地震群ノ襲來アリタリ。之レヲ「栗野地震」ト稱ス。是當時新聞紙上ニ霧島噴火ナル誤報ヲ喧傳シタルモノニ屬ス。該地震ニ就テハ今村博士ノ調査報告ニ詳シ。

栗野地震

○栗野地方ノ強震。七月十四日午後九時十三分栗野吉松地方ヲ中心トセル強震アリ、栗野吉松ノ間ニ於ケル川添縣道ハ此爲メニ崩壊シ、栗野岳温泉ニ於テハ道路龜裂シ垣石所々墜落セリ、川添縣道ハ水田面ヨリ約一丈ノ高サニ築キ上ゲラレ且ツ南北ニ向ヘルモノナルガ、地震ノ震動ノ方向ニ隨ヒテ長サ十五間程ノ部分西方ニ崩壊シ田地ヲ押出セリ、此地震ニ引續キ同地方ハ強弱震續發シ、翌日ニ至リテ止マズ、土民前年ノ櫻島爆發ヲ聯想シテ心中恟々露管セルモノ多シ、又霧島ニアリテハ湯之野温泉ノ泉源崖崩ノ爲メニ位置ヲ變ツ、沸騰セル泥土十尺ノ高サニ噴出セル等ノ爲メニ、此處ニモ噴火ヲ豫想シテ恐惶ヲ來タセリ、地震ハ其後次第ニ減退シタリシガ、同月二十四日ニ至リテ再ビ強震ヲ起シ、

爾後次第ニ微弱トナレリ。實際震央附近ノモノハ近ク聳エタル栗野白鳥等ノ舊火口ノ活動ヲ恐レタルガ、固ヨリ斯ル事ノ起ルベキ筈ナク、人心次第ニ鎮マリシモ、十六日以後ハ却テ比較的ニ遠隔シタル地方ニ於テ霧島噴火問題ヲ惹起シ、一時新聞紙上ヲ賑セリ。……地震ヲ最モ著シク感シタルヲ栗野岳温泉ナリトス、現ニ余モ八月六日午前七時十分以後三十分間ニ於テ三回ノ弱震ト、六、七回ノ微震ヲ同所ニ於テ感シ、隨テ其震源ハ該所ノ北方半里(註。今村博士ノ言ニ依レバ飯盛山ノ西方約十二、三町ノ所ナリト言フ)ノ地方ニアリシコトヲ推測セリ、此ノ位置ハ今回ノ地震群ニ付キ略ボ共通ノ震源タリシコト吉松栗野地方ニ於ケル調査ノ結果ニ依リテ知ルコトヲ得タリ。

吉松地方ハ大正二年五月十八日以後ト十月十七日以後トニ於テ前後二回今回ノ如キ地震群ニヨリテ襲ハレタルヲアリ、其地震ノ頻繁ニ起リタルヲ井ニ温泉ニ多少ノ濁濁ヲ生シ湧出分量ヲ變化セシメタルヲハ今回ノ場合ト同様ナレドモ、地震ノ強度ハ今回ノ場合稍勝リテ何レモ局部的ノ火山性地震ナリキ、霧島ノ最近爆發ノ開始ハ大正二年十一月八日ニシテ、第一回ノ地震群ノ初發ヨリ六ヶ月後ニ起リ、第二回ノ場合ヨリ三週間ノ後ニ起レリ、噴火ハ其後同年十二月九日ト翌大正三年一月八日及ビ十三日トニ起リタルガ、櫻島ノ噴火スルニ從ヒ以後ハ鎮靜ニ歸セリ、而シテ大正二年ニ於ケル二回ノ地震群ハ吉松ヨリ北東ニ當レ、眞幸地方ニ起リタルモノナルガ、今回ハ其位置ヲ移轉シテ吉松ノ南東一里許即チ栗野岳温泉ノ北半里程ノ處ニアリキ。(以上今村博士復命書抜萃)

尙今村博士ニ依ルニ該地震群ハ川内川ヲ距リタル栗野ノ對岸地方ニテハ殆ド感知セザリシト云フ。愚考スルニ此ノ現象ハ川内川が一斷層(或ハ龜裂)線ニ當レルニ基ケルガ如シ。

尙大正五年十二月下旬大口ノ北西方、鹿兒島及熊本兩縣界ニ互リテ起リタル地震群ハ前記ノ地震群及火山活動トハ全ク無關係ナリト思考スル能ハズ、特ニ大

正三年一月櫻島噴火後ニ現ハレタル鹿兒島地方ノ地盤ノ變動ト密接ノ關係アルヲ以テ余ノ地域外ニ屬スルモ此處ニ附記ス。

記録上ノ活動ニ就テ余ノ卑見ヲ述ブ

地質學上充分ニ活動力ヲ保有セル霧島火山トシテハ地質圖上橙色ニ塗色セル部分ニシテ此ノ中ニ現在活動力ヲ發現シ或ハ其痕跡ノ新鮮ニ保存セラル、地點トシテハ東部ニ於テハ御鉢火山、中部ニ於テハ中岳及新燃火山、西部ニ於テハ硫黃山火山ナリトス。此等ノ三中心ノ中ニ御鉢(東岳)及中岳(新燃、中岳)ノ活動ニ就テハ記録中ニ明記セリ、而シテ今村博士ハ前兩者ニ就テ次ノ如ク記載セリ。

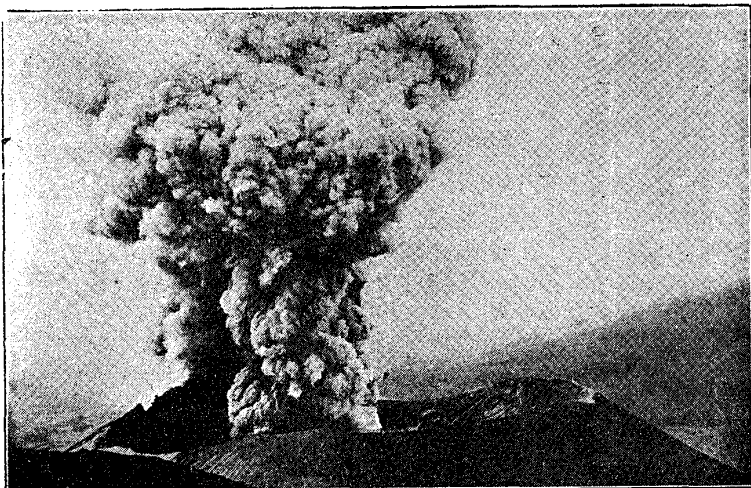
過去三〇〇年以前ノ噴火口ハ二者其ノ孰レナルカ詳ニセズト雖モ、延寶後ノモノハ之レヲ推知スルニ難カラズ、新井白石ノ霧島岳記ハ元祿五年(西曆1698)ニ御鉢ノ盛ニ活動スル狀ヲ思ハシムベク、享保ノ大噴火ハ新燃ノ噴出ニシテ其名稱ハ此活火口ノ新出カ或ハ永キ休眠狀態ニアリシ爲メニ與ヘラレタルモノナルベシ、何レニシテモ延寶永ノ噴火ハ御鉢ニ屬シ、次ニ享保年間ノ新燃ニ移リ、更ニ下ツテ明和ニ至リテハ再ビ御鉢ノ活動トナリシモノト思ハル、橋南溪ノ西遊ハ明和ヲ去ル十數年後ニアリ、次ニ文政ニ至リテ新燃再度ノ爆發アリ、爾後今日ニ至ルマデ此噴火口ハ靜謐ノ狀態ニアリ、御鉢ハ明治十二、三年迄噴火口内ニ樹木有リ銃獵ノ場處ナリシト言フモ、其頃硫黃ノ露出ヲ發見シ之カ採掘ニ從事シタリシガ、同十三年九月ニ至リテハ噴火ノ狀態ニ進ミ、同廿一年ニハ其勢力特ニ烈シク、爾後ハ數年間引續キテ靜謐ノ狀ヲ示スアアルモ、時々覺醒シテ現在ニ及ベリ、サレバ最近二四〇年間ニ於テハ霧島ノ兩火山ハ交

互ニ活動シタリト稱スベク、是偶然ノ結果ニハアラザルベシ。……

記録中ニハ硫黃山ノ活動ニ就テハ明記セズ、唯文政四年ノ記録中ニ「加久藤白鳥邊の地面同様に云々」ナル文句アリテ新鮮ナル火山砂礫ニ依リテ埋メラレタル土地ヲ想像セシメ、且ツ享保元年ノ噴火記録中ノ「西岳」ナル語ト連結シテ伊カ西部火山ノ活動ヲ思ヒ起サシムル如クナルモ、現在ノ材料ニテハカ、ル言外ノ推量ハ甚ダ危險ナリ。唯將來古記録ノ雲集ノ結果自然ニ活動史ノ明瞭ナラン日ニ對シテ現在ニ於テカ、ル疑問ヲ殘サンノミ。今村博士ノ說カル、有史時代ニ於ケル東岳及中岳ノ交互活動ハ事實ナリ、本調査ノ結果余ハ之レ以外ニ西部ニ於テモ危險區域ノ存在スルヲ附加セン、特ニ大正二年及四年ノ地震群ガ新鮮ナル火山、飯盛山附近ニ於テ起リシトニ注目シ今後ノ現象ニ俟タン。次ニ尙最近ノ御鉢及硫黃山兩火山ノ情況ヲ記シ記述ノ足ラザルヲ補ハン。余ノ硫黃山火山ニ登リシハ大正三年九月及大正五年八月及十一月ナリ、大正三年ニ比シテ大正五年ニ於テハ其處ノ硫氣孔ハ甚ダシク勢ヲ強メ音響ヲ立テ、噴出シツ、アリキ、蝦野溫泉ノ湯守ノ言ニ依ルニ其ノ廿日程前(余ノ登山ハ八月十二日ナリ)ヨリ其ノ勢ヲ増シタルモ以前ヨリハ硫黃氣ガ少ク(此處ニテハ硫黃ヲ採集ス)水蒸氣ヲ増加セリト言フ、御鉢火山

ノ情況ニ就テハ第十五頁ニ記述シタリ、其ノ他明治四十四年頃ノ活動ノ有様ハ本文第二圖及第八版第三圖ニアリ、明治四十一年頃ノ情況ニ就テハ渡邊俊一郎氏ノ記述アリ。(地質學雜誌第十五卷第百八十一號)

御鉢ハ本火山群中最後ノ餘喘ヲ漏シツ、アル所ニシテ、全峯樹草絶テナク、悉ク赤褐色ノ砂礫岩層之レヲ被覆ス、火孔ハ圓形ニシテ西壁ハ低ク、東方高千穂ニ面セル側ハ尙約百米突高シ、内壁ノ勾配四十五度以上ニ達シ降下スベカラズ、壁面整然タル鎔岩層ヲ露出シ、實ニ成層火山ノ特色ヲ示ス、其ノ間ニ二、三ノ噴氣孔アリ、孔底ハ噴煙ノ爲メニ詳ニスル能ハズト雖モ、疾風一陣之ヲ拂フ時ハ稍其ノ様ヲ窺フヲ得ベシ、中央ニ直徑三十米突許ノ一段深キ火孔アリ、其ノ中ニ高十米突許ノ鎔岩塊ヨリナル中央火孔丘ノ如キアリ、火孔丘及丘側等處々ヨリ盛ニ白煙ヲ噴出ス、是レ水蒸氣ノ外亞硫酸瓦斯、硫化水素及



硫黃ノ蒸氣等ノ混合物ナルベク、氣孔附近多量ノ硫黃昇華シ、硫氣甚シ、噴煙ノ程度ハ阿蘇火山(新噴火口)ヨリハ微弱ナルハ勿論ナレドモ、三十二年頃ノ盤

梯山ノ如ク、那須火山ニハ遙カニ勝レリ。而シテ季節天氣風ノ方向ニヨリテ噴煙ノ勢一定セズ、冬春ハ夏秋ヨリモ烈シク特ニ天氣ノ變化セントスルトキ及東風ノ際ハ盛ナリト言フ、予ノ目撃セル所ニヨレバ約二十分毎ニ間歇的ノ噴煙ヲナスガ如シ、予等登山ノ際ハヤ、微弱ノトキニシテ少シモ危險ヲ感セザリシト雖モ其ノ夜鳴動ヲ伴ヒ小噴火ヲ爲シ社殿附近迄盛ニ灰燼ヲ降下セリ、土地ノ人ノ談ニヨレバカ、ルノハ珍ラシカラズト言フ、又二十年來案内ニ從事セルモノ、言ニ依レバ彼火孔丘ノ岩塊ハ夜中全ク赤光ヲ放チ是レヨリ立チ上ル白煙モ二丈位迄ハ火焰ノ如ク東天白ムニ及ビテ漸ク消滅スルヲ常トス、彼ノ火孔丘附近ノ模様モ數日ニシテ變化スルヲアリ。(以上渡邊氏) (報文抄録)